

- 議題
  - 研究の進め方
    - メンバーの位置付け
      - 渡邊先生は具体的な研究目的と担当として入るのか？
  - 研究計画の担当者をはっきりさせたい
- 目的・進め方に関する議論
  - 鏡味先生
    - Madeさんと共に研究課題1を担当する
    - データはMadeさんが持っていると思うが
      - 生活用水に関するデータがどこまで手に入るかが課題
      - どこまで川の水位と井戸水の水位が測定できるのか？
      - もっぱら、二次元的・表面的な変化が中心となる
    - 井戸水と言った理由
      - 中下流域における井戸水の水位低下が問題
    - 灌漑から言えば漏水だけ
      - それが井戸水を支えているとも言える
    - 水谷先生
      - 生活用水
        - バリは井戸が多い
        - 雑用水で水路の水を使う
      - 畑地で水を引くということは無いと思われる
      - 井戸水の使われ方というものは興味深い
    - 中桐先生
      - 手取川で地下水水位の観測をしている
      - バリでの観測は難しい
        - 井戸が多すぎるからデータが取りづらい
  - 中桐先生
    - 中桐先生なりの研究計画資料を作成した
    - 狙い
      - プロジェクトそのもののゴールを起点として計画を立てている
      - プロジェクトとして期待される具体的成果
        - 数カ国における地域レベル水管理の総合的評価
        - 制度や管理組織の枠組みも含む、地域レベル水管理システムの基本構造デザイン
    - 地域
      - バリと南スラウェシを扱う
    - 水谷先生の計画書へのコメント

- 今の変化がどうなっているのか、今の動態を明らかにするだけでなく
- 最終的に何らかの提言をするのか、という時には
  - 現状の良し悪しの判断が必要となる
  - また、バリやスラウェシにこうすれば良いというのではなく
    - 現在と将来の情報を提供し
    - それに基づいて現地の人意思決定をする
    - そのための意思決定支援ツールを作ることに価値がある
- 鏡味先生との議論で気づいたこと
  - 良い水資源管理計画ができたとしても
    - 地元の人々が受け入れるかは別の問題
    - 条例などは政府側から見るとそれが良いと思ってやっている
      - だが、それが行われないのは
      - 当事者の理解不足などがある
  - 水土の知というのならば
    - システムを現実に役出させるための教育などの一連のシステム群が必要ではないか？ということを示す必要がある
- 大枠のプロセスとして考えた時
  - この先、どのようにすれば良いのかということを示す必要がある
  - 客観的に示される現状があり、それに対して判断をして、
  - 将来がどうなるかを現在の資料をベースにある程度の予測を立てる
- 最終的には総括が必要であることを考えると
  - オーソドックスなものを抱えておくと他のところへ適用しやすい
- 水文学的に考える
  - 水量
    - どこまで可能かは別として
    - 利用可能水量
      - まずもって重要なことは、物理的に利用可能な水量はどの程度か？
      - これがわかってから部門別の用水量を求めていく
    - 部門別用水量
      - ひとつの流域でどれだけの量が使われるか
  - バリに特化すると
    - ホテルの問題がある
    - ホテルは営業業務用水
    - 後は農業用水の利用となる

- ポイント
  - 量と質の話がある
    - 量がどれだけあっても使えない水はある
    - これは、少なくとも現状で使用に耐えられるか否かといったレベルになる
- 産業別経営状況
- 水管理について、ユーザー側がどのように考えているのか？
  - 公平性やコンヴィヴィアリティと関わる
  - ユーザーが満足していない状況では水管理は難しい
  - ユーザー側の意見を把握する必要がある
- 現況に対する評価と診断
  - 生産性
    - これはある程度は求められる
  - **持続性**
    - 持続可能性と言うが...
      - **何年持てば持続的なのか？**
      - **ここは全体会議で議論すべき点**
    - 水質の低下
      - これがあると持続的ではない
    - 経済状況
    - 水管理組織体制
      - スバックというシステム
        - 評価は受けているが
        - スバック連合の連合長はずっと同じ人が就任している
    - 水利施設の耐久性
      - 既に出来上がったものがずーっと持つのか
  - 公平性
    - これをどのように捉えれば良いのか？
    - 公平性に関する見解は人によって様々
      - 権利として皆が水が取水できれば公平だとする考えもある
    - 何をもって公平とするのか？
      - ここで考えるべきなのは
      - 使っている人が「これが妥当である」という心理的状况にあるのが最もふさわしい
      - 差はあるが妥当だと思うというニュアンスが良いと思われる
  - コンヴィヴィアリティ
    - 渡邊先生

- 共有しているという意識
    - well-beingがあるから満たされているとしている
    - 2つある
      - 中心的なPJの言葉にわかりにくい言葉だから使い方を
      - 新しい言葉を使うということの意味
    - 鏡味先生
      - これなら我慢できるという意味合いのほうが強いと思う
    - 中桐先生
      - コンヴィヴィアリティは現状の評価と診断の枠組みから外れるかもしれない
  - 将来予測
    - 今のトレンドのままだとどのようになるのか?
    - 何らかの条件変化の下ではどうなる?
  - 提言
    - 今のままで良いのか否か?
  - 主として研究課題3が該当する
  - 水谷先生のコメント
    - 提示していただいたのは全体的な枠組みである
    - 11月の全体会議を確認したい
- 仲上先生
  - 流れから見れば研究課題2が該当する
    - 広い視点で研究課題2を行う
  - 大きいことを言うのは得意だが
    - システムの脆弱性という問題がある
      - バリの都市としての変化と気候変動
      - バリに初めて行ったのだが
      - 状況変化の予測といった問題を考える必要がある
  - 皆さんからのコメント
    - 統合的水資源管理をバリから描く
  - 渡邊先生からのコメント
    - 濱崎宏則@東京大学
    - 統合的水資源管理は未だに言葉だけ
      - これに具体性をつけないといけない
    - 現場には関わっていただきたい
- インドネシア研究計画全般に関すること
  - それぞれに複数の小テーマに関わっていく
  - それらを研究が進行する際に再編成をしていく

- 要望
  - 水文調査が必要
  - ベースライン調査があり
- 研究者分担
  - 研究課題0
    - ベースライン調査
      - それぞれのところで実施しないことをカバーする
    - 水文データの収集
      - 現況把握が問題となる
    - 研究課題1~3で行われて取り落としたものをピックアップする
  - 研究課題1
    - Kagami
    - Made
  - 研究課題2
    - Nakagami
    - Mizutani
  - 研究課題3
    - Nakagiri
    - Mizutani
  - 明確には線引きできない
- 渡邊先生
  - 水谷先生が考えている研究の進め方
    - これを具体的なアプローチとしてリファインするイメージを持っている
    - 研究課題1~3を15分で話すというイメージ
  - 今の固定メンバーだけで考えないでほしい
  - 水谷先生からのコメント
    - 詰めていくことがあるが...
    - 本日は、単純にバリ研究の大枠と役割分担が決まれば良いと思っている
    - 南スラウェシについて
      - まだ議論をしていないから11月はまだ出せない
  - 研究課題0
    - モデルの話が入ってくると思われる
    - 河川モデルは既に以前のプロジェクトに存在する
  - 人材の組み込み
    - インドネシアの人材
    - 国内の研究者
- メンバーについて
  - インドネシア側の研究者の都合
    - 分類をしたのだが
      - 研究者

- Satyawan
    - Budiasa
  - 協力者
    - Pitana
    - Saptomo(Dody)
    - Sudarta
    - Agnes
  - 分類の必要は無いということで結論が出た
- 東大の Arif さん
  - Budi さんの弟子
- 海外のメンバー追加
  - 無職になるとマズイ
  - Made さんが無職になっているのでこれは C-09 で解決する予定
- コア・メンバー
  - アシスタントが雇えます
  - 責任を負わされます(笑)
  - プロジェクト全体のことを考える
- インドネシアにおいて議論をした際に
  - 院生を加えることもあると思うが
  - その際に指導教授も加えることは？
    - OK
- 南スラウェシについて
  - 水谷先生
    - これからバリで現地調査をする際に
      - 全員が顔合わせができる時に1回は行かないといけない
      - その際に Agnes さんと話をしながら現場を見るしかない
      - 皆が動かないとわからない
      - 11月の全体研究会で確認はできる
    - もう一つの手段として
      - バリを短期決戦でケリをつける
      - その上で南スラウェシに取り掛かるという戦略もある
    - 大規模灌漑システムそのものを議論することは難しい
  - 仲上先生への解説
    - 渡邊先生
      - 簡単に言うと
        - 歴史的な灌漑が安定しているにもかかわらず、いじっているところ
        - スラウェシは色々なことが発生している
        - 雨季の補給灌漑をしていた
          - ダムを作ってみたのだが

- 水が来ないなどのうまくいっていない問題がある
  - JICAが入っている
    - 社会実験的なNPOを立ち上げている
    - それらを追いかけてながらやっている
    - 小国先生のように現地に入っている人もいる
  - Agnesさんは面白いが
    - JICA的なアプローチ
  - 水谷先生
    - 乾季の灌漑はどこも失敗している
      - 日本だって成功例は無い
      - そういう意味では南スラウェシではかなりの挑戦的な試みをしている
  - 鏡味先生
    - 水系データを系統的に採取することは難しい
- 渡邊先生
  - Agnesさんは新しいプロポーザルが出てくる予定
  - 皆が大勢でスラウェシに行く必要は無いのではないのか？
    - バリの調査をしている間に次の調査地を漁っていくことは良いと思われる
  - まずはバリをはっきりさせた上で
    - 少しずつAgnesさんが手掛けているスラウェシに着手をしていく
- 11月の全体研究会(1)
  - コンセプト
    - どのようなコンセプトでこのようなことを実施するのか？
    - 各地域のプロジェクトがどのように関わるのか？個人的に関わるのか？
  - 渡邊先生からの説明
    - 全体としてどのようなところへ行き、何を担当するのか？ということが第1の目的
    - 地球研全体のプロジェクトとして理解をする
    - 具体的なテーマや地域が動いているから動かしてみる
    - インドネシアでもトルコでも同じアプローチをしたい
  - 鏡味先生からのコメント
    - 渡邊先生のプランを聞いてやっていることを示すことだけしかできない
    - お互いがやっていることを確認していくというので良いのか
  - 田村さんからの説明
    - 地域に関することは来年以降でかまわない
  - 水谷先生からのコメント
    - 全体研究会でバリのプロジェクトのやるべきことを示そうとする
    - そのために、本日の研究会で詰めていく
    - 例えば

- バリの灌漑として具体的にはこのようになっているということを話す
  - 渡邊先生からの説明
    - ディスカッションがある
    - 水谷先生にはバリだけでなく、南スラウェシにおいて何をやるのかということをお話してほしい
      - 水谷先生からのコメント
        - スラウェシについてはまだ手つかずのために言いづらい
  - 中桐先生からのコメント
    - 「ここならこのようなデータがあるよ」という議論をするために今回の資料を作成した
  - 水谷先生からのコメント
    - 中桐先生が示したものは「水土の知」PJの議論
      - 本当ならば全体についてこれをプレゼンをして議論をする
    - バリの研究計画はある程度、固めていく必要がある
      - バリの研究計画から見ればどうなるかを考える
  - 渡邊先生からのコメント
    - 他の地域を意識して話していただければ良い
- 11月の全体研究会(2)
  - 議論
    - バリ研究計画はどこで話すべきなのか？
      - 案としては
    - バリに関する Session が欲しい
    - プロジェクト全体としてどのようなゴールが欲しいのか？
      - これが議論できれば良い
    - Opening Address を長くしたほうが良いのでは？
    - 他地域で計画が出るのか否か？
    - 愛知川は？
      - 日本人だけでやろうと思っている
      - 研究は日本人が携わる
        - 外国人メンバーが来るのがわからない
    - リーダーが改めて全体のエッセンスを話す
      - バリは本日の議論を骨子として
      - それぞれのメンバーがどのように考えていくのか？
    - 5年間のプロジェクトがあり、役者が見えてきて、海外を見た上で
      - キックオフをする会議では
      - 3～5年後を目指してやっていく
  - まとめ

- 水谷先生の時間は延長をしていく
- インドネシアチームはまとめていく方向で
- 何が解かないといけない問題かを明らかにしていく
- 最後に
  - バリ研究計画案 ver.2 の改訂ポイント
    - 「研究課題 0」を追加する
      - 中桐先生に原案作成をお願いする
    - 「研究課題 1」
      - 鏡味先生が中心
        - Made さん
    - 「研究課題 2」
      - 仲上先生が中心
    - 「研究課題 3」
      - 中桐先生が中心
    - 田村さんはまとめに入ってくる
    - 将来の予測・診断に関する提言までを含めてできるか
      - 将来は予測不可能性といった問題を常に抱えている
  - 11月のプレゼンテーション
    - 分担課題を前提としながら話をしていく
    - バリの現状をクリアにしていく
- その他
  - 所内での勉強会
    - 前もってテーマをリスト化して貰えれば...